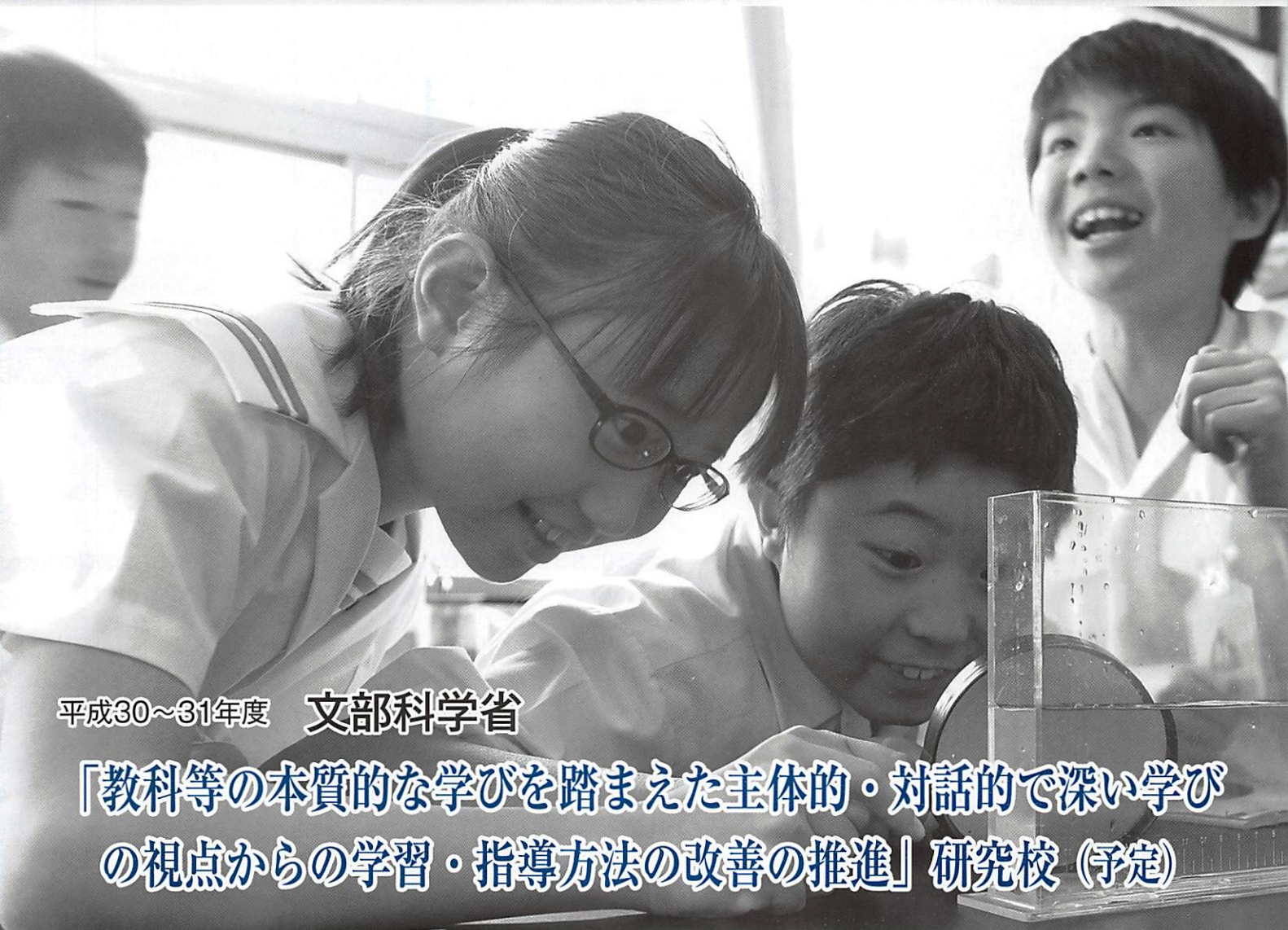


附属小 研究だより



平成30～31年度 文部科学省

「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学び の視点からの学習・指導方法の改善の推進」研究校（予定）

2年前の春に起こった熊本地震。本校も甚大な被害を受け、例年通りの教育活動を継続するのが困難な状況に陥りました。それからというもの、大学、学校、保護者が強固に連携しその困難に立ち向かってまいりました。

震災に直面し、本校職員は、未来を生きる子どもたちにいかなる困難にも立ち向かっていけるような資質・能力を育てたいという強い願いを持ちました。そうして立ち上げたのが本研究です。

これまで私たちは、子どもたちが課題と正面から向き合い、知識・技能を総動員して、主体的に解決していくような文脈（真正の学び）をいかにしてつくり出していくかということに焦点を当て、研究を進めてまいりました。その真正の学びを追究していく過程で、子どもが目の前の課題を自分事として捉えることや、課題解決に向けて他者と納得するまで考えを伝え合う対話が生じることなど、少しずつではありますが成果も見えてまいりました。

本年度は、文部科学省から「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善の推進」の委嘱を受け、これまでの研究をもとに、教科等の本質や子どもの思いや願いを大切にしながら実践を積み重ね、さらなる研究の深化を目指していききたいと思います。

教科等研究紹介

子どもが夢中になる 「真正の学び」を求めて

研究部長 宮原 大輔



1 これからの社会で生きて働く力
知識基盤社会と言われる21世紀。グローバル化やAIなどの技術の進歩といった社会的変化は加速度を増し、予測困難な社会になってきています。これまでの「何を知っているか」という、知識量を増やすだけの教育では、獲得した知識が学校の中だけでしか通用しないため、変化の激しい社会においては使えないものとなってしまいます。そのために、私たちは、この「何を知っているか」だけではなく、「どのように学ぶのか」「何ができるようになるのか」という資質・能力の育成を目指した教育に取り組んでいます。

予測困難な社会を生き抜く力をもった子どもを育てていくためには、獲得した知識・技能を駆使しながら、他者と協働的に問題解決を行っていくことができるような「真正の学び」を追究していくことが欠かせません。

そこで、私たちは、「真正の学び」を実現するために、現実の世界に存在する本物の実践にできるだけ文脈を近づけて学びをデザインしてきました。そうすることで、学んだ知識・技能は本物となり、これから出会う問題状況に対しても柔軟に対応できる、まさに生きて働く力となると考えたからです。

2 子どもとともに学びをつくる

「真正の学び」を実現するために、具体的な取組として、次のことを行ってきました。

まず、子どもが夢中になって学びに向かうためには、目の前の課題に対して「何とかして解決したい」という切実感をもたせることが必要です。そのために、実際に生活や社会で直面する、できるだけ本物に近い状況に即した問題場面を設定し、単元を構成します。その際に、子ども自身が何を解決していけばよいのか、どのような方法で解決していけばよいのかといった見通しを明確にもたせることが大切です。そして、学習を進めていく中で、子どもは何を解決したいと思っているのか、何につまずいているのかという子どもの見取りを丁寧にに行い、子どもの思考の流れを大事にしながら、単元を柔軟に修正していきます。

次に、主題を単元のゴールまで粘り強く追究していくためには、質の高い課題であることが欠かせません。そこで、授業の中で生まれる子どもの「問い」や「つまずき」に着目しながら課題を設定していきます。そうすることで、自分とは違った考えをもつ他者との豊かな「対話」を促し、「納得のいく表現がしたい」という子どもにとって表現する必要性を生み出すことができるのです。

そして、子どもが学習の中で獲得した知識・技能は、その単元にとどまるものであってはなりません。そのため、授業の終末や単元末に振り返りの場を設定し、子どもがどのような学びの中で新たな知識・技能を獲得し、それをどのように活用しながら課題を解決してきたのかを表現させていただきます。

3 「主体的・対話的で深い学び」の姿

このような「真正の学び」の実現を目指して研究を進めてきたことで、夢中になって課題を解決していく姿や、他者と対話しながら新たな知を構成していく姿、既有的知識と新たな知識を関連付けたり、組み合わせたりしていくことにより、新たな発見や意味を生み出す姿が見られるようになりました。これらは、まさに今言われている「主体的・対話的で深い学び」の具体的な姿ではないかと考えます。

昨年度は、各教科等の本質に迫る「深い学び」の在り方について研究を進めました。本年度は、さらに、「深い学び」の具現化に向け、各教科等の「見方・考え方」を働かせるための方略を明らかにしていきます。

夏の実践研修会や2月の研究発表会では、子どもの姿を通して「主体的・対話的で深い学び」の在り方について提案できるように研究を進めています。

国語科



中尾 聡志



溝上 剛道



藏田 和明

深い学びを生み出す国語科授業の創造

5年生「わらぐつの中の神様」では『金婚式の孫スピーチ』をしよう』を言語活動に設定しました。「孫スピーチ」本番に向け、子どもたちは登場人物の人物像と相互関係を読むための「わたしの問い」を自ら見だし、それらを友達との対話によって解決していききました。その結果、感動の「孫スピーチ」完成に向け、何を読み解くべきか自ら思考しながら、物語と向き合う子どもの姿が生まれていきました。

新学習指導要領の教科の目標に明示された「言語活動を通して」。この国語科の指導の原理に今一度立ち返り、魅力的な言語活動の設定と学習課題解決のための「私の問い」を大事にした授業を提案します。

生活科



坂口 静磨

生活科における「深い学び」を目指して

ペットボトルで作ったいかだをプールに浮かべ、こう岸まで渡ろうとする子どもたち。ペットボトルのつなぎ方やその数、漕ぐ道具と次々と新たな課題が生まれる中で、授業以外の時間にも追究する姿が見られました。

本年度は、解決したい課題が連続して生まれるような単元構成を工夫し、子ども一人一人の追究を促すための学習環境を構成していきます。追究していく過程で、個の気づきや考えを全体で共有し、子ども同士のかかわり合いの場を工夫したり、学習過程の振り返りを促したりすることで、一人一人の子どもの学びが深まっていく授業を提案します。

社会科



平川 純哉



定松 良彰

「社会的な見方・考え方」を働かせる授業とは

3年生「市の移り変わり」において、単元前半では「市電」利用者の増減と熊本市の様子の変化とを関連付けて考える学びを進め、後半で現在5路線の延伸案が挙げられている事実と出合わせました。すると、「どの案がいいのだろう」と利用者の立場やこれまでの熊本市の様子の変化などをもとにしながら、友達との対話の中で「社会的な見方・考え方」を働かせ、最善と思う案を「選択・判断」し提案する子どもの姿が見られました。

このように、子どもの学びの文脈に寄り添いながら、子どもが「社会的な見方・考え方」を働かせて、対象となる社会的事象を追究したり解決したりする「深い学び」のための単元構成について、研究を進めていきます。

音楽科



蒲地 悦子



中島 千晴

自ら音楽表現の追求へ向かう子どもを目指して

「歌詞の意味は分かったけど結局何を伝えたいのかな?」「作った人の思いと、それに合う強弱を話したい。」

6年生「臘月夜」で、とりあえず歌えるようになった子どもたちは強弱のない楽譜を前にこんな発言をしました。答えのない音楽表現を追求したり、音楽を深く味わったりする中で子どもたち自身が対話を欲し、そこから学びを生み出していく。そんな授業が私たちの目指すところです。

その実現のために、題材のゴールとしての発表の場や子どもの思いに沿った課題設定の仕方を工夫します。また、共通の学びを生み出す全体での話し合いと、グループ活動での協働の在り方に焦点を当てた授業を提案します。

算数科



大林 将呉



高野 倫浩



篠田 啓子

数学的活動を通して概念を獲得する

5年「図形の角」において、矢じり形の敷き詰めを行いました。操作上は敷き詰まりますが、子ども達は「本当に敷き詰まるというのだろうか」と批判的に考えました。そして対話の中で辺から角に視点を移し、四角形の内角の和と一周の角度が360°になる性質をもとに、矢じり形が敷き詰め可能であることを論理的に証明していきました。

本校算数科では、子どもたちが自ら課題を見だし、数学的な見方・考え方を働かせてその課題を解決する中で、概念を獲得していく数学的活動の研究開発を行っています。子どもたちが自ら数学を活用し、課題を解決する本物の文脈で学ぶ授業を提案します。

図画工作科



毎床 栄一郎

学びはつくりだしていく過程にある!

昨年度「つくりだそう!美しいウッドランド」では、ウッドブロックを材料として、グループで一つの建物に見立てた製作物の完成を目指しました。教室いっぱいの活動の場において、製作物全体の形の美しさを表現するために試行錯誤しました。その中で、左右対称にすると美しくなるという造形的な見方が広がる姿がありました。

今年度は、子どもたちの思いを引き出す魅力ある題材の開発によって学びの文脈を生み出します。そして、造形要素に着目した鑑賞における、対話や試しの場での活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせて課題を解決し、よりよい表現へとむかう授業を提案します。

理科



松山 明道



近藤 祐樹



牛嶋 克宏

子ども自ら問題解決にのめり込む姿を目指して

6年生「ものの燃え方」で「空気があるところで火をつければ、木材は燃えるはずなのに、燃えない。」という説明し難い不思議な自然事象に出合った子どもたち。解決の道筋を子どもたちに委ね、教師がその方法にとことん付き合うことで、これまでの知識や技能を駆使し本気になって解決に挑む姿が見られました。実験過程や結果を友だちと共有し、吟味する中で考察を深めていったのです。

本校理科部では、問題を自分事として捉えることを大切にしています。そして、自分たちで考えた観察・実験を行っていく過程の中に対話を位置付け、子ども自身が科学的な問題解決にのめり込んでいく授業を提案します。

家庭科



大廣 紘子

実生活に生きて働く家庭科教育を目指して

5年生の「みそ汁を作ろう」では、家族のために朝ご飯を作ろうというゴールを設定しました。「朝食の準備に使える時間には限度がある」という子どもたちのつぶやきから、調理時間を10分と設定しました。調理を繰り返し行う中で、具材の選び方や切り方、効率的な調理の手順などを工夫していく姿が見られました。

今年度は、時間やお金、材料や道具などの枠組みを示し、より実生活に近い状況を設定します。そして、限られた状況の中、必要な活動や手順の道筋を試行錯誤することを通して、自分の思いに近づくためのよりよい方法を見だし、生きて働く家庭科の授業を提案します。

体育科



平嶋 秀盛



磨田 慎太郎

「試してみたい」思いから、生きて働く力をつける

「少ない人数でベースカパーはどこにいくべき?」ベースボール型の学習において、自分の動きが大事であることはわかるが、どう動いていいかが分からない。そんな切実な困りごとをみんなで共有し、対話で解決できたときに、本物の力がついてくると信じています。

体育科では、本年度も体育の見方・考え方を働かせ、子どもたちが分析的に動きの良さを見だし、課題を解決していく授業を行っています。そのために、考え出したことを繰り返し試すことのできる環境や全体の動きを客観視できるような環境づくりを通して、生きて働く力が育成をされる授業を提案します。

外国語活動



高田 実里

子どもの思いをコミュニケーションの学びの土台に

「みかんが欲しくて“I want (an) orange, please.”って言ったら、オレンジ色の画用紙を渡されたの!」と言ったらよかったんだろう。」買い物場面で自分の思いとはちがう相手の対応に驚き、表現を考え始めた子どもたち。自分の思いが相手にうまく伝わらないという事実と出合った時、子どもは使う言語表現の妥当性やジェスチャーの効果をも自分事として考えていきます。

外国語教育の移行期元年。伝えたい内容や目的があるからこそ生まれる、子どもの「伝えたい」「理解したい」という思いを土台に、豊かな言語活動を通してコミュニケーションの力を高めていく授業を提案します。

保健・健康教育



角居 禎子

心身の健康づくりを実践する力を育む

健康に過ごすためにすべきことは知っていても、健康を損なうという危機感やもっと健康になりたいという思いを強くもって生活している子どもは多くありません。しかし、生涯にわたって健康を保持増進していくためには、自分の心身の健康に関心をもち、健康課題を解決していこうとする力を身に付けていく必要があります。

そこで、心身の状態を見つめ、健康を自分事として捉え、健康課題に気づき、かかわり合いの中でその解決方法を考えていく機会をより大切にしています。他者と協働しながら意識や行動をよりよく変容させることで、子どもが心身の健康づくりを実践していくような健康教育を提案します。

栄養・食育



松尾 夕貴

自らの食生活を豊かにする力を高める

「だしがないとみそ汁って、こんなにおいしくないの?」これはみそ汁の飲み比べの後、子ども同士の対話の中から生まれた言葉です。この言葉をきっかけに、自分がいつも無意識に食べていたみそ汁のおいしさの秘密を、子どもたちは解き明かそうと考え始めました。食に関する学びでは、このような体験活動や他者との交流を通して、自らの食生活の課題の解決方法を考えたり、新たな視点を取り入れようしたりする子どもの姿を目指します。さらに、共同体験である給食を教材として活用したり、教科等での学びを食に関する授業につなげたりしていくことで、子どもたちの学びを深めていきます。

総合的な学習の時間



豊田 誠一郎

よりよい社会を創る総合的な学習の時間

「様々な症例から最適な診察をしたり、莫大な判例からの確な判決をしたりするのは、AIの方が得意でしょ。だから、医者や弁護士の仕事でさえもなくなるかもしれない」「でも、AIがどれだけ進化したとしても、新しいものを創り出したり、患者や顧客の悩みに寄り添ったりできないと思う。アイデアに溢れて、思いやりがある医者や弁護士だったら、これからの時代でも求められるよ」このように、子どもたちが様々な変化に対して積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成して新たな価値につなげていくような授業を提案します。

夏の実践研究会のご案内

期 日	平成 30 年 8 月 23 日 (木) 8:30~16:00
内 容	公開授業 国語(附属小 中尾教諭) 算数(附属小 大林教諭) 教科別授業研究会 各教科等の授業づくりセミナー

日 程	8:00	8:30	9:00	9:45	10:00	10:45	11:00	12:30	13:30	15:55	16:00
	受付	オリエンテーション 全体会・ 分科会	公開授業Ⅰ 国語	休憩	公開授業Ⅱ 算数	移動	教科別 授業研究会	昼 食	各教科等授業づくりセミナー ユニット1 ユニット2	閉会 行事	

※今年度の各教科等セミナーは、ユニット制で行います。お好きな教科等を組み合わせ、自分にぴったりの研修プランをお作り下さい。

申し込み	参加費は¥1,000 円です。 別紙案内状を参照の上、ファックス(096-356-2499)にてお申し込みください。メールでの受付も行っています。 メールアドレス(nakaosato.kumafushou@gmail.com)
------	---

講 師	国語 平成音楽大学専任講師(本校附小OB) 榎山範夫 先生 算数 熊本大学 教授 山本信也 先生
-----	---

申し込み〆切	平成 30 年 8 月 16 日 (木)	後援 熊本県教育委員会 熊本市教育委員会
--------	----------------------	-------------------------

平成 30 年度研究発表会のご案内

期 日	平成 31 年 2 月 8 日 (金) 9:00 ~ 16:00
全体会講師	京都大学 准教授 石井英真 先生



附属小学校ホームページのご紹介

新しいコンテンツ続々登場!!

- 授業研究最前線
- 実践・研究ブログ

校内で行われた最新の授業実践が掲載されます。

臨場感あふれる各教科の取り組みを随時更新します。



ホームページ elem.educ.kumamoto-u.ac.jp

熊大附属小 検索

©2010熊本県くまモン

研修会・講師に関するお問い合わせ先

校内研修や研究会の講師として本校教員をお考えの際は、電話が次のアドレスにお問い合わせ下さい。

ktanaka@educ.kumamoto-u.ac.jp

(教頭 田中恒次)

熊本大学教育学部附属小学校 研究だより VOL.49

発行日 平成 30 年 5 月 22 日

編集・発行 熊本大学教育学部附属小学校 〒860-0081 熊本市中央区京町本丁 5-12 TEL 096 (356) 2492 FAX 096 (356) 2499